

## 自己意識と模倣行動

内藤 哲雄

### Self-consciousness and imitation

The purpose of this study is to compare, from the standpoint of imitation, the concept of self-consciousness and self-awareness with the key concept of social consciousness derived from the theory of assimilative behavior. At first, we found three differences between them: (1) in the former, attention to the intention or motive of the other person is derivative, but in the latter, main: (2) public and private aspects are chief constituents of the former, while intentional imitation and psychological attachment are of the latter: (3) the former stresses watch by indefinite others, but the latter feeling and behavior to the definite other. Secondly, we investigated theories of social facilitation, conformity, and deindividuation, comparing self-consciousness and self-awareness with assimilative behavior and social consciousness.

**Key words** : self-consciousness, self-awareness, social consciousness, imitation, assimilative behavior

キーワード : 自己意識、自覚状態、社会的意識性、模倣、同化行動

### はじめに

われわれは社会生活を営む中で、自分自身の感情や行動について考えたり、自分がどのような人間であるかに思いを巡らすことがある。そしてこれらの認識の過程や内容が、対人行動にさまざまな影響を及ぼしている。それでは、われわれはどのようにして自己を意識し、自己の概念を獲得し、自身で評価するようになるのであろうか。

発達の段階をたどるならば、次のようになろう。最初は、出産にともない母親から物理的に分離独立する。しかし乳児にとっては、自身と外界が渾然一体となった状態にある。やがて乳児は、自身の身体運動とそのフィードバックを知覚することなどにより、自分の身体が外部環境から独立していることに気づくようになる。ただこの段階では、物理的存在としての側面でのみ自己に気づくにすぎない。心理的・社会的特性を認識できないので、感覚的自己と呼ばれることもある<sup>1)</sup>。この感覚的自己を基礎として、幼児は自己意識を強めながら、その領域を心理的・社会的側面にまで拡大していく。このようにして、「自分は○○なのだ」という自己に関するさまざまな概念が、有機的に統合されて「自己概念」が形成されてくる。

ところで、この自己概念が形成されるにあたっては、自分の行動に対する他者の諸々の反応  
信州大学医療技術短期大学部一般教育等 ; Tetsuo Naito, Liberal Arts, Sch. Allied Med. Sci., Shinshu Univ.

が強く影響している。たとえば、「お前は、やさしい子だ」「お前はいじわるだ」といわれたり、仲良く一緒に遊んでくれたり、逆に自分の方から誘っても遊んでもらえないといったことがある。このように、自分に対する印象を他者によって直接あるいは間接的に言動に表出されるとき、まるで身体像が本物の鏡に映し出されるように、他者を鏡として自己像が映し出される。そして、これらの像が次第に自己概念に組み込まれるのである。こうした現象が、Cooley によって鏡映自己(looking-glass self)と名づけられたものである<sup>2)</sup>。鏡映自己の概念は、現実我としての自己像が他者からの認知的・情報的影響によって形成されるという側面を取り上げ、強調しているといえよう。というのは、次の段階で出現する「自己評価」が成立するために必要な、理想的な自己像すなわち理想我の形成については直接言及しないからである。理想我と現実我の比較が、自己評価に他ならないからである。現実我が理想的な自己に近づけば、自尊感情が生じる。さらに理想我は、あるべき目標を明示することで、動機論的な側面を付加している点でも重要である。それでは、理想我はどのようにして獲得されるのであろうか。

直接的な方法としては、親などが、望ましいと考える理想像を言語的に伝達したり、それに沿った行動には報酬をあたえて強化し、そうでない場合には報酬をあたえないとか罰をあたえるというのがある。しかしよりダイナミックで全体的な形成のメカニズムとしては、モデルの示範を模倣することである。まず最初にあげるべき理論は、Freud の同一視(identification)の機制であろう<sup>3)</sup>。これは、モデルと同一化することで、相手の外観、特性、属性を全体的あるいは部分的に取り入れることである。これによって理想我が形成されることになる。また、モデルへの模倣的行動を取り上げた学習理論としては、Bandura の社会的学習理論が著名である<sup>4)</sup>。この理論では、モデルの示範を単に観察するだけでも、対面せずに書物を読むだけでも、模倣が生じることを明らかにしている。

さて、上述のように、自己の概念の獲得や評価の成立には、模倣現象が深くかかわっている。それでは、逆に自己概念が模倣的行動に及ぼす影響についてはどうであろうか。これが本研究に着手する契機となった問題提起である。「自己意識」は、近年になって著しい発展を遂げた実験社会心理学の手法を用いて、盛んに研究されるようになったテーマのひとつである。本稿では、まず実験社会心理学の領域での自己意識に関する代表的な研究を概観する。ついで、著者が模倣の機制として提唱する同化行動の鍵概念のひとつである「社会的意識性」の概念と、Bussらの「自己意識」および「自覚状態」の概念との比較検討を試みる。さらにこれを踏まえ、社会的促進と同調行動を取り上げ、模倣的行動と自己意識や社会的意識性との関係について考察する。最終部分では、自己意識の喪失を扱った没個性化と模倣行動の関係について、同化行動の理論と関係づけながら論考する。

## 1、自己意識について

自己意識(self-consciousness)は、自分がどのような状態にあるのか、他者にはどのようにみられているのであろうかに注意を向け、社会的な関係を吟味する意識過程であるという点で、きわめて人間的な機能をもつ。しかし、われわれは常に自己を意識して生活しているわけではない。状況によって自己意識は強まったり、弱まったりする。また、自己を意識しやすい人が

いる一方で、あまり意識しない人がおり、個人差が存在する。ここでは状況要因や特性要因を検討した代表的な理論として、Wicklund らの客体的自覚理論と Buss らの自己意識理論を取り上げ、内藤の同化行動の理論における社会的意識性との関係を考察しよう。

#### (1) Wicklund らの客体的自覚理論

Wicklund らの客体的自覚(objective self-awareness)の理論<sup>5)6)7)</sup>に従えば、人の注意は自己か外部環境のいずれかに向けられる。自己に注意が向けられ意識化された状態は、自覚状態(self-awareness)と呼ばれる。実験的に自覚状態を生じさせる方法としては、鏡やTVカメラで自己の姿を見せるなどによって、自己のシンボルと接触させることが多い。この他には、実際に他者から注目される状況に置くなどの手続きが採られる。自覚状態に置かれた人の注意は、自己の行動の適切さの基準(standard of correctness)に向かうとされる。適切さの基準は、当該状況における行動の指針であり、信念、理想、規範などが含まれる。しかし、通常では現実の行動レベルは理想的な適切基準より低いため、負の自己評価がもたらされる。基準にかない正の評価が生じた場合も、さらに基準を向上させることで負の自己評価が生じるようになる。このために不快感が生起し、結局最終的に自覚状態の回避が発生するというのである。

#### (2) Buss らの自己意識理論

自覚状態が自己に注意が向けられた結果として生じる「状態」であるとするならば、自己に注意を向ける傾向の個人差としての「特性」を考えることもできる。Buss らは、こうした自己意識(self-consciousness)特性に注目し、その構造と機能を明らかにしようとした。彼らは、自己意識特性を測定する検査(self-consciousness scale: SCS)を開発する過程で、この特性が私的自己意識(private self-consciousness)、公的自己意識(public self-consciousness)、社会的不安(social anxiety)の3つの下位尺度から構成されることを見いだした<sup>8)</sup>。私的自己意識とは、思考、動機、態度といった自己の内的側面に注意を向けやすい傾向であり、公的自己意識とは、自己の容姿、振舞いといった他者が観察可能な外的側面に注意を向けやすい傾向である(表1参照)<sup>9)</sup>。社会的不安とは、他者が存在する状況での動揺しやすさを示すものである。

上述のように、特性論的なアプローチから、対象化される自己には私的側面と公的側面のあることが明らかにされた。そこで Buss(1980)は、自覚状態に関しても単一ではなく、私的自己意識と公的自己意識のそれぞれに対応した、私的自覚状態(private self-awareness)と公的自覚状態(public self-awareness)が存在すると考えた。私的自覚状態は私的自己意識の高い人に生じやすいが、内省、黙想、日記を書くこと、小さな鏡に向かうなどの条件下でも喚起されるとした。そして私的自覚状態にある場合には、自己の身体、気分、情動、動機、空想、自己評価などへ注意が向かう。その結果として、より強い私的自己意識がもたらされるか、あるいは感情、動機などが増大化されると考えられた。他方の公的自覚状態は、公的自己意識が強くても喚起されやすいということはない。他者に観察される、あるいはカメラを向けられるとか、三面鏡、写真、ビデオテープ、録音テープなどによって知覚的フィードバックがなされるというように、喚起されるためには、現実には他者が存在するか、状況の手がかりが必要とされる。つまり、公的自覚状態は、公的自己意識からその存在が類推されただけで、両者は直接的にはつながりをもたないと考えられているのである。両者の関係については今後さらに検討される

表1 SCSにおける自己意識特性の検査項目

私的自己意識	公的自己意識
自分がどんな人間であるのかいつも理解しようとして努めている	なにかするときは人の目を考慮する
あまり自分ということを意識しないたちである*	自分を相手に見せるときは注意深くなる
自分を反省して見ることが多い	どうやって自分の気持ちを相手に示そうかと気になることがある
自分がこういう人間であればなあと思案することがときどきある	人によい印象を与えようといつも気をつける
自分自身についてあれこれ考えない*	でかける前に必ずみだしなみをたしかめる
自分の本当の気持ちに注意がむきやすいたちである	人が私のことをどう思っているか気になる
自分はあのときなぜそのようにふるまったのかと考えてしまうたちである	いつも自分の容姿に気をくばっている
自分がいくぶん距離をもって自分自身を見つめている感じをもつことがある	
自分の気持ちの変化に敏感である	
なにか問題にぶつかったときは自分の心の動きに気をくばる	

<sup>11)</sup> 0 (まったくあてはまらない) ~ 4 (よくあてはまる) の評定点で答えさせる

<sup>2)</sup> \* 印の項目は評定点を逆転させ、それ以外の項目は評定点をそのままもちいて合計点をだす

(Fenigstein et al., 1975 : 押見, 1986より)

こととして、公的自覚状態が喚起されることによる変化をみると、当然のことながらこの状態では、自己の公的な側面に注意が向かうことになる。ただし、喚起の手法として知覚的なフィードバックが用いられる場合には、フィードバックされる内容に関連した公的側面に注意が向かう。これらによって、不快感の生起や自尊感情の低下、社会的行動の制止などが生じるとされている。

### (3) 社会的意識性の概念との比較

内藤<sup>10)11)12)13)</sup>は、Bowlby<sup>14)</sup>の愛着と Piaget<sup>15)</sup>の模倣に関する発達の研究を基に、意図的な愛着行動の出現する以前の段階での愛着的行動を身体的接着(bodily attachment)と呼び、これが無意図的模倣(unintentional imitation)と表裏の関係にあることを明らかにした。そこでこの機制を同化行動(assimilative behavior)と称し、無意識の機制が支配的な事態では成人においても生起することを実験的に検討してきた。さらに、内藤<sup>12)13)</sup>は、同化行動の生起する無意識の機制が支配的な事態と対置する事態をもたらすものとして、社会的意識性(social consciousness)の概念を提唱した。ここで、社会的意識性とは、モデルの意図や感情を推察し、自身の行動が対人関係に及ぼす影響についての配慮をしながら、愛着行動や模倣行動を意図的に遂行しようとする意識である。より一般的に表現すれば、意図的な模倣的行動の発現に際しての、モ

デルとの社会的関係についての配慮ということになる。そして社会的意識の働く発達段階に至ると、同化行動の2側面である身体的接着と無意図的模倣はそれぞれ変容し、心理的接着(psychological attachment)と意図的模倣(intentional imitation)とに分離・独立し、単独でも機能するようになるとされている。

上述の社会的意識性の定義は、自覚状態ないしは自己意識の概念と近似しているといえよう。というのは、自覚状態あるいは自己意識においては、いずれも自身に注意の焦点があるとはいえ、自他の社会的関係を吟味する意識過程が介在すると考えられるからである。この点は、自己が他者にどのように認知されるかに注意が向かう公的自覚状態に関しては、定義そのものからして自明であろう。また、他方の私的自覚状態が喚起される場合についてであるが、たとえ私的なものであっても自己への意識は、他者との、相手が漠然とした不特定な場合であれ現実の場合であれ、かかわりの中で生じるといえよう。とくに個人が実際に他者とともにいる場面では、他者についての認知や他者との比較を少しも意識することなしに、そのとき自分がどのような状態にあるのかを認知することはないといえよう。別言するならば、自身と自分の置かれた状況を、他者の目から観ようとするのが公的自己意識や公的自覚状態であり、自分の目で観ようとするのが私的自己意識や私的自覚状態である。したがって、少なくとも対人的な社会場面においては、公的であるか私的であるかを問わず、自己意識あるいは自覚状態は、他者との社会的な関係に関する意識過程を包含すると結論できよう。

それでは、社会的意識性と自覚状態ないしは自己意識との差異はどこにあるのだろうか。まず第1の差異としては、社会的意識性においては、相手の意図や動機への配慮が強調されるのに対し、自覚状態や自己意識ではそれらへの注目、自己への意識化にともなう副次的なものとしてされていることであろう。それよりもさらに目につく第2の差異点としては、自覚状態や自己意識の場合には、公的なものと私的なものに分類されていることがあげられる。社会的な場面で公的な自覚状態が喚起されると、集団規範への意識が強調され、集団圧力に沿う方向での行動が出現しやすくなると考えられる。また、私的自覚状態が喚起されると、自己規範へ従おうとする行動が出現しやすくなることが予測される。Asch タイプの実験<sup>16)</sup>に代表されるような集団規範と個人規範が対立する事態では、両者の対蹠的な行動が典型的に出現することになる。さて、同化行動生起の条件として概念化された社会的意識性に関してであるが、こちらの場合には機能しない事態に注目するが故に、その内容については意識的には分類されていない。ここで改めて振り返ると、同化行動が発達的に変容すると意図的模倣と心理的接着に分離、独立する点が注目される。つまり暗黙のうちに、相手と一致する行動を意図的に発現しようとする側面と、相手への愛着的行動を意図的に発現しようとする側面との2側面から、社会的意識性を想定していたことになるのである。そして、一方が他方の手段とも目的ともなり得ることについて言及していることから、両者を対立的にとらえるよりも、対人関係のなかで相互補完的に働く側面を強調しているといえよう。ここから第3の差異点のあることに気づかされる。自己意識や自覚状態では、自己への意識化に焦点があるがために、いわば自分を監視する一般的抽象的な目としての他者は取り上げられても、自己と関わる特定の相手としての視点は取り上げられていない。他方、社会的意識性においては、特定の相手に対する好意的な感情や行動

が重要な変数とされているのである。

以上の論点から、社会的意識性と自己意識ないしは自覚状態とでは、それぞれかなり異なった次元での分類を試みていることが明らかにされたといえよう。そこで次の課題として、両概念のそれぞれの視点を活用し合うような考案が可能かどうかを、検討することが要請されよう。

さて、まず自己意識や自覚状態について取り上げると、既述のように、研究者の目は自己に注がれるがゆえに、他者に関しては外部環境の一部として片付けられがちである。ところが他者は、私を受動的に観察する相手であるだけでなく、能動的に私を評価し、好悪感情を抱き、それによって私への行動を決定する相手である。このような事情から、とりわけ自分が好意をもつ相手には、自分に対して好ましい評価をするようにと望むものである。そして公的自覚状態が喚起されるときは、手続き（現実の他者によって観察される、カメラを向けられる、ビデオテープや録音テープによる知覚的フィードバック等）からも明らかのように、たとえ現実には存在しなくとも、他者の存在が少なからず意識されているといえよう。そこで、Jones が追従 (ingratiation) の研究の中で取り上げたような<sup>17)</sup>、相手にあたえる自己の印象を統制するために意図的、積極的に振る舞う行動である印象管理 (impression management) の視点と他者の要因を、とくに公的自覚状態に関連して理論モデルに導入することが提案されよう。もちろん反論として、より肯定的に他者に評価されようとする意図が、自覚状態がもたらされることで「行動の適切さの基準」として喚起され、この基準へ一致させる行動が発現する、との解釈が持ち出されるであろう。したがって、印象管理や他者要因を追加して考えなくとも、現状で十分であると反駁されるであろう。しかし、行動基準としての意識化を持ち出すまでもなく、社会的な場面において公的自覚状態が喚起されるならば、その定義から副次的に、他者をもつ自分に対する印象そのものを管理しようと、他者に直接働きかけようとする行動の派生することが帰結されよう (表1参照)。さらに、公的自覚状態では、印象管理そのものを目的として、具体的な行動基準が選択される傾向性が高くなるともいえる。それならば理論モデルのなかに積極的に「印象管理」と「他者」を取り上げるべきではないか、との指摘が再び生じることになる。それとともに、このような他者に対しての対人感情の要因を取り上げることが提案されよう。

他方の社会的意識性の側については、まず自己意識の概念から、社会的な意識化状態の程度を左右する個人特性の存在を仮定することが示唆されよう。そして、表1に示されているような自己意識の質問項目は、たとえそのまま使用できないとしても、翻案するのに有効であるといえよう。たとえば、自己意識に對する「他者 (への) 意識」とか、自他関係への意識化に関する「対人関係 (指向) 意識」といった特性を想定することができよう。また、社会的意識性をも喚起すると想定される自覚状態を喚起するための実験的手法のいくつかは、逆に欠如させる手法を考案する手がかりとなるという点も含め、採用が可能であろう。さらに、社会的意識性を公的と私的な側面に分割することの意義についても、吟味してみる価値があるといえよう。あらかじめ理論的な価値を検討してからというのはいうまでもないが、具体的にすぐに実験に着手できるものとしては、特性としての公的ならびに私的自己意識の強度と、同化行動の生じしやすさとの関係についてであろう。また同様の実験パラダイムは、他者意識や対人関係意識の特性についても、測定用のテストを開発することで可能となろう。

## 2、自己意識と模倣的行動

自己意識の文脈の中でこれまで取り上げられてきた模倣的行動としては、社会的促進(social facilitation)と同調(conformity)がある。ここでは、自己意識の理論からの説明の問題点を、同化行動やその概念構成にかかわる社会的意識性の視点を中心として考察する。

### (1) 自己意識と社会的促進

社会的促進は、他者の存在が個人の作業を促進する現象に着目し提唱されたもので、その機制には無意識的なものと意識的なものの両者が存在する。ところが、概念が規定され研究が進展するにつれ、反射的・無意識的模倣としての促進の側面よりも、他者から低く評価されはしないかとの評価懸念や、「成績は人よりすぐれているほどよい」といった社会規範的な影響の側面が注目されるようになった。WicklundとDuvalによる自覚状態での規範顕現化による社会的促進の実験的検討<sup>18)</sup>もこの文脈に位置づけられる。彼らは、他者の存在は自覚状態を喚起する要因の1つとされていることから、自覚状態における作業量の増加を証明することによって社会的促進の現象が説明できるとみなした。すなわち、他者の存在→自覚状態の喚起→適切さの基準の意識化→作業量の増大のプロセスが、社会的促進の生起機制に他ならないと解釈されたのである。この考え方に基づき、鏡による自覚状態条件と鏡のない統制条件で遂行量を比較したところ、彼らの仮説通り自覚条件の方が多かったというのである。

上述のような、自覚状態の喚起による社会的促進の説明には、いくつかの問題が指摘される。現実の社会的促進では、いかなる作業や行動に注目するか、またその作業や行動の遂行に際しての方法や身ぶりとかしぐさなどの面で、観客や共働者の影響を受けているといえよう。ところが自覚状態による説明では、実際には他者が存在するか否かにかかわらずみられる作業量の増加だけに注目し、社会的促進と呼ぶという点が問題である。作業中の自分の姿を鏡でみるだけで他者の存在を必要としないような作業量の増加を、社会的促進の中核機制と呼ぶべきかということである。他者の存在は、単に自覚状態を喚起するだけではないであろう。それゆえ、自覚状態の概念だけでは、社会的促進の全体像を説明できないといえよう。この点は、Wicklundらの思慮不足というよりも、反射的・機械的模倣のような模倣的側面についても言及したMoede<sup>19)</sup>の視点を看過した、Allport<sup>20)</sup>以来の定義に問題があったというべきかも知れない。同様の指摘は、「他者の存在が個人の覚醒水準を高め、個人にとって優勢で支配的な反応の出現率を高める」と規定するZajonc<sup>21)</sup>に対しても当てはまるからである。第2の問題点は、Moedeが取り上げた反射的・機械的模倣にかかわるものである。ダイエット中の肥満者が他者につられて食事の量を多くとってしまうとか、犯罪行為を目撃することで暴力行為を模倣してしまうなどということがあがるが、これらの場合には規範の顕現化がなされていない事態と考えられ、規範への意識化による説明は困難である。このように論を進めるならば、自覚状態が意識的・意図的行動の発現をもたらす点にだけ限定する方が有利なように思われる。つまり、自覚状態では意識的・意図的な社会的促進が生じやすく、規範などの影響を受けるのに対して、自覚状態が欠如した事態では無意識的・無意図的な社会的促進が生じやすいと規定した方が、社会的促進の本質のより迫ることになるといえよう。

さて、同化行動の場合にはどのようなのであろうか。同化行動においては、とくに社会的促進の概念を用いずに、模倣的行動として現象を説明しようとする。すなわち、社会的意識性の生じる事態では、意図的模倣が発現し、社会的意識性の欠如した事態では、無意図的な模倣行動と無意図的に身体的な近接を指向する身体的接着が、同化行動の機制の2側面として発現する。また発達的な規定として、初期では同化行動の機制のみが生起し、社会的意識性が獲得される段階以降は、通常は変容し分離・独立した意図的模倣が心理的接着と同様に単独で機能することになるが、上記したように社会的意識性が欠如する事態では同化行動の機制が露呈するとされている。この部分では、成人の無意図的な社会的促進を説明できる点で、現状の自己意識・自覚状態の理論よりも有利である。しかしながら意図的な社会的促進に関しては、同化行動の理論から派生した意図的模倣の概念では、説明できない部分がある。たとえば、他者と同程度以下の遂行量については模倣で解釈できるとしても、他者に優ろうとする意図的行動については、規範的影響についての要因を取り込むことなしに、模倣だけで説明するには無理がある。可能だとしても、相当に迂遠な説明を要することになろう。この点に限界があるが、関連する多くの事態を説明しようとし過ぎる場合には、説明概念の拡張にともなう曖昧化を進める危険性もある。本来の理論対象を明確に絞り、周辺の部分の説明は限定し、簡潔にする方が有益であろう。社会的促進に関しては、あえてこれ以上の説明力をもととせず、同化行動の理論の限界として受け入れるべきであると考えられる。

## (2) 自己意識と同調行動

社会心理学の専門用語として頻出する同調行動とは、自己の信念と他者（集団）の要請との間に二者択一的な葛藤を生じる事態での、要請への行動の一致と定義される<sup>22)</sup>。さて、当該場面での自覚状態や特性としての自己意識は、自己へ意識が向い、自身の信念や自身が他者からどのように認知されるかに注意し、それらに配慮した行動が生じる傾向を示すものである。したがって、自己意識や自覚状態の強度や有無は、同調行動の生起や反応の様式に影響することが推論される。DuvalとWicklund<sup>5)</sup>やDuval<sup>23)</sup>の実験的研究では、TVカメラを向けたり、録音された被験者自身の声を再生することで、公的自覚状態を喚起した。その結果、同調行動が生起しやすくなることが確認されたのである。また、FromingとCarverは、自己意識の特性と同調行動の生起率を検討し、私的自覚意識と同調には負の相関を、公的自覚意識と同調には正の相関をみいだした<sup>24)</sup>。さらに、CarverとScheierにおいては、同調とは逆方向であるリアクタンス(反同調)の生起との関係が検討された<sup>25)</sup>。その結果、私的自覚意識とは正の相関がみられたが、公的自覚意識との間には相関がみられなかった。

以上の知見からは、私的自覚意識の強い者や私的自覚状態におかれた者では、自己の規範や態度に一致した行動が、公的自覚意識が強い者や公的自覚状態にある者では、集団規範に一致した行動が、生起しやすくなると結論できよう。

ところで、初期の同調行動研究における主要な関心は、集団圧力に関する要因を解明することにあつた。そこで、集団の規模(人数)、メンバーの反応の一致率などが実験的に検討されてきた。その後MoscoviciとFaucheuxは、逆に革新的な少数者が多数者側に影響を行使し、集団規範の変容や新たな形成が行なわれる条件として、少数者の反応の一貫性要因を取り上げ、



その効果を実験的に明らかにした<sup>26)</sup>。また、同調する相手の差異に着目したものとしては、仲間、教師、母親への同調を発達的に検討した藤原の研究がある<sup>27)</sup>。これらはいずれも、集団構成やメンバー間の関係に注目したものである。しかしながら同調行動に関しては、その定義からしても自己が重要な役割をしており、自己の特性や状態にも目を向けることが必要である。このような論拠から、自己意識や自覚状態に関する研究、とくに「公的」および「私的」の枠組みは、同調行動の理論の発展に寄与するところが大きいといえよう。現在までの自己意識や自覚状態に関する研究の大半が、個人要因として同調行動の研究に取り込むことができ、既述の社会的促進における場合よりもはるかに貢献できる。

これに対し同化行動は、集団規範と自己規範の対立が意識化されない、換言すれば、反同調や非同調も含めた同調行動の機能しない事態を扱っている。すなわち、同化行動と同調行動は、相互補完的に社会的行動を説明することになるのである。ところで、同化行動から発達的に変容・分離した、他者への心理的接着と意図的模倣によって、同調行動の生起を説明することは可能である。集団のメンバーに対する好意と集団からの排除を避けるために、集団への一致行動が生じたと解釈できるからである。また、反同調(antiformity あるいは counterformity)は、負の心理的接着(非好意的感情)によるものとして、独立(independence)は、心理的接着の機能しない事態で生起すると考えることができよう。しかし、自己意識や自覚状態の概念に比べ、全体的に迫力を欠く点は否めない。

### 3、没個性化と模倣行動

没個性化(deindividuation)の概念は、LeBonの「群衆心理」<sup>28)</sup>にまで遡ることのできる古いもので、近年の「自己意識」に関する研究の文脈から再び注目されるようになったものである。これは、集団状況における個人の自覚状態、自己意識の喪失を扱ったものである。ロックコンサートの観客や熱狂的な野球応援団にしばしばみられるように、周囲の他者のなかに埋没してしまって、自己を意識しなくなり、社会的な役割や規範、自身の価値観などから解放された状態を指す。

実験的に没個性化を生じさせるための操作として知られているのは、被験者の独自性感覚を刺激しない方法、被験者を匿名状態におく方法、集団性の強い活動に従事させる方法である。第1の、個人の独自性や他者との差異性の感覚を刺激しないようにする方法は、他者と対置するものとしての自己への意識や、自己と対立するものとしての他者の圧力を感じさせないで、いわば気取らない普段着のままの被験者を、自然に集団に融け込ませようとするものであるといえよう。具体的には、目立たない服装で参加させるとか、制服や白衣を着用させる処置がとられる。また、実験中に名前では呼ばないとか、個人情報を知らないようにするとか、個々人の反応には関心のないことを伝える手続きが採用される。比較対照のため設定されることのある個性化条件では、逆の処置や手続きが用いられることになる。第2の匿名性をもたらず条件においては、後で責任を問われない安心感から、自己の行動を統制したり抑制する規範意識や、対置するものとしての自他関係の意識が希薄となると考えられるものである。方法としては、頭からフードをかぶらせ、体型を隠すため大きめの白衣を着用させるとか、暗室に入れるなど

して、どこの誰であるかさとられていないと思わせる処置がなされる。第3の方法は、集団への強い一体感を生じさせ、集団に埋没させることで、個人としての意識を失わせると考えられるものである。凝集性や集団感情を高めるような集団活動として、揃いの服装をさせてグループ名で呼んだり、全員で歌わせたり、暗くした部屋で強烈なドラム演奏に合わせて踊らせたりする。文字通り強烈な集団一体感情を生起させるための活動に従事させる。

上述したように、それぞれの方法がもたらす没個性化の内容や質は必ずしも同じとはいえない。共通する全般的な傾向としてあげられているのは、他者の顔やその他の特徴を記憶しにくくなること、社会規範や自己規範の影響力が弱まり、他者への攻撃や身体的接触などが抑制されなくなり、集団に魅力を感じ一体化することである。

ところで、Greenwaldは、自己が行動の統制に関与していない状態を没個性化とみなし、これを2つのタイプに分けている<sup>29)</sup>。第1のタイプは社会性なき没個性化(unsociated deindividuation)であり、この場合自己の内的な基準だけでなく社会規範も働かず、暴動や乱痴気騒ぎにみられるように、社会的逸脱行為、非社会的刺激への反応性の増大、社会的混乱が生じる。第2のタイプは社会性をもつ没個性化(sociated deindividuation)で、自己は機能しないが社会的統制の程度は高いため、軍隊の統率的行動やスポーツの組織的応援のように、規範遵守、周囲の他者に対する反応性の増大、集合的秩序が生じるとされている。ここで、社会性とは何かが問題となろう。押見は、ここでの社会性を公的自覚と解釈している<sup>30)</sup>。そして、私的自覚と公的自覚の両者が低下しているのが社会性なき没個性化で、私的自覚は低下しているが公的自覚はむしろ高められているのが社会性をもつ没個性化であると推論している。

さて、Greenwaldの見解に沿ってこの押見の推論が成立するためには、まず前提として「自己が行動の統制に関与していない事態」と「私的自覚が低下ないしは欠如した事態」とが等価でなければならない。換言するならば、公的自覚の有無とは無関係に、私的自覚の低下ないしは欠如だけで没個性化が生じるといえないなければならない。ここで表1の公的自己意識の検査項目を参照するならば、素朴な疑問が起こる。公的自己意識とは、他者の目を感じながら自己を意識することのほうである。このような状態で、はたして没個性化が生じるであろうか。ところが、押見の自己意識特性と仮想場面をもちいたシミュレーション研究においては、上記の推論が支持されたというのである<sup>31)</sup>。そこで次のような推測が導き出される。ここでの公的とは、一般社会全体に対するのではなく、そのときの自分を取りまく個人や集団に対するものであるということである。そうした個人や集団と一体化しているならば、集団的規範は自己に対置するものとして意識化されることはないであろう。したがって、公的自覚状態の程度に関係なく、私的自覚が低下すると個人的な行動基準や個人に取り込まれている社会規範が検索されなくなり、他者や集団と一体化ないしはそれらに埋没した没個性化が生じやすくなるということになる。

以上から、さらに次の論点が展開される。私的自覚を欠く没個性化状態で公的自覚のある場合、すなわち社会性をもつ没個性化状態で、他者との一致行動(模倣的行動)が生じるときの意図性である。まず、意図的なものは存在するであろう。自身の行動基準や一般社会的な規範が意識化されなくとも、当該集団の他者により印象をもたれることを期待して、他者の行動を

意図的に模倣することは可能だからである。それでは、無意図的なものについてはどうであろうか。結論からいうと、存在しないと考えられる。というのは、他者の目を感じながら行動することは、自他関係を考えながら模倣することになるからである。それゆえ、同化行動におけるような無意図的な模倣が生起するのは、私的自覚も公的自覚もない、社会性なき没個性化の状態においてだけであるということになろう。暴動や乱痴気騒ぎは、単に匿名状況であるだけでなく、まさに我を忘れ人の目にも気づかなくなった事態で発生しやすいといえよう。こうした事態を構成する実験手続きとしての有効性を、既述した方法の範囲内で検討するとすると、第1の個人の独自性や他者との差異性を刺激しないようにしたり、第2の匿名状況を設定する手続きだけでは不十分であろう。第3の方法としてあげられている、集団への強い一体感を生じさせ、集団に埋没させることで、個人としての意識を失わせる手続きが、該当すると考えられる。

## 要 約

本研究は、実験社会心理学の領域で近年盛んに研究されてきた「自己意識」や「自覚状態」の概念を取り上げ、著者が模倣の機制として提唱する「同化行動」や、その生起に関する鍵概念である「社会的意識性」との比較が試みられた。また考察に際しては、とくに自己と模倣との関係に焦点を置き、社会的促進や同調行動、さらには没個性化にも言及した。

自己意識ないしは自覚状態と社会的意識性との主要な差異として、次の3点が指摘された。すなわち、1)前者では相手の意図や動機への注意は自己への意識化にともなう副次的なものとしてされるのに対して、後者では相手の意図や動機への配慮を強調していること、2)前者では公的と私的に、後者では意図的模倣と心理的接着に2分され、下位カテゴリーの次元が違うこと、3)前者は不特定の他者の監視的な目を、後者は特定他者への感情や行動を重視することである。これらの両概念の視点を参考に、それぞれの概念に付加されるべき要因等が検討された。

社会的促進との関連については、自己意識や自覚状態は意図的・規範的な部分を、同化行動は無意図的な部分を、それぞれ分け合形形で説明できることが確認された。また同調行動については、社会的意識性の概念はそれほど有効とはいえず、公的・私的自覚（意識）の概念の方がより強い説明力をもつことが明らかにされた。

没個性化に関しては、私的自覚が低下ないしは欠如する事態で生起することが吟味された。また没個性化は、2つのタイプ、すなわち公的自覚も欠く社会性なき没個性化と、公的自覚の存在する社会性をもつ没個性化に分割できることが確認された。さらに、社会性なき没個性化の事態が、同化行動の生起する事態に他ならないとされた。

## 引用文献

- 1) Buss, A. H.: Self-consciousness and social anxiety. W.H. Freeman & Company, 1980.
- 2) Cooley, C.H.: Human nature and the social order. Charles Scribner's Sons, 1902.
- 3) フロイト 井村恒郎(訳): 自我論. 83-188, 日本教文社, 1970. (Freud, S.: Massenpsychologie und Ich-Analyse, 1921.)

- 4) バンデューラ 原野広太郎 (監訳) : 社会的学習理論 : 人間理解と教育の基礎. 金子書房, 1979. (Bandura, A. : Social learning theory, 1977.)
- 5) Duval, S. & Wicklund, R. A. : A theory of objective self-awareness. Academic Press, 1972.
- 6) Wicklund, R. A. : Objective self-awareness. In L. Berkowitz (ed.) Advances in Experimental Social Psychology, 8, 233-275, Academic Press, 1975.
- 7) Wicklund, R.A. : Discrepancy reduction or attempted distraction? Journal of Experimental Social Psychology, 11 : 78-81, 1975.
- 8) Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. : Public and private self-consciousness : Assessment and theory. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 43 : 522-527, 1975.
- 9) 押見輝男 : 自己意識. 対人行動学研究会 (編) : 対人行動の心理学, 第10章, 第2節, 227-233, 誠信書房, 1986.
- 10) 内藤哲雄 : 対人機制としての同化行動に関する実験的研究 ( I ) : 同化行動生起におよぼす一条件としての恐怖の効果. 心理学研究, 48 : 156-162, 1977.
- 11) 内藤哲雄 : 模倣行動に関する一考察 : 同化行動の提唱とその展望. 早稲田心理学年報, 13 : 56-65, 1981.
- 12) 内藤哲雄 : 同化行動の理論的考察 : 模倣と接着の発達の展開. 対人行動学研究, 3 : 13-19, 1984.
- 13) 内藤哲雄 : 対人関係と模倣の発達. 信州大学医療技術短期大学部紀要, 15, (1) : 31-43, 1989.
- 14) ボウルビィ 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) : 母子関係の理論 ( I ) : 愛着行動. 岩崎学術出版社, 1976. (Bowlby, J. : Attachment and loss. Vol. 1, Attachment, 1969. )
- 15) ピアジェ 大伴 茂 (訳) : 模倣の心理学. 黎明書房, 1968. (Piaget, J. : La formation du symbole chez L'enfant, 1945.)
- 16) Asch, S.E. : Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgment. In H. Guetzkow (ed.) Groups, leadership and men, 177-190, Carnegie Press, 1951.
- 17) Jones ,E.E. : Ingratiation : A social psychological analysis. Meredith Publishing Company, 1964.
- 18) Wicklund, R.A. & Duval, S. : Opinion change and performance facilitation as a result of objective self-awareness. Journal of Experimental Social Psychology, 7 : 319-342, 1971.
- 19) メーデ 瀬川良夫 (訳) : 集團の心理. 東洋書館, 1944. (Moede, W. : Experimentelle Massenpsychologie, 1920.)
- 20) Allport, F.H. : Social Psychology. Houghton Mifflin, 1924.
- 21) Zajonc, R.B. : Social facilitation. Science, 149 : 269-274, 1965.
- 22) Krech, D., Crutchfield, R.S., & Ballachy, E.L. : Individual in society. McGraw-Hill Book Company, 1962.
- 23) Duval, S. : Conformity on a visual task as a function of personal novelty on attitudinal dimensions and being reminded of the object status of self. Journal of Experimental Social Psychology, 12 : 87-98, 1976.
- 24) Froming, W.J. & Carver, C.S. : Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm. Journal of Research in Personality, 15 : 159-171, 1981.
- 25) Carver, C.S. & Scheier, M.F. : Attention and self-regulation : A control-theory approach to human behavior. Springer Verlag, 1981.
- 26) Moscovici, S. & Faucheux, C. : Social influence, conformity bias, and the study of active

minorities. In L. Berkowitz (ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, 6, 149-202, Academic Press, 1972.

- 27) 藤原正光：同調性の発達的变化に関する実験的研究：同調性におよぼす仲間・教師・母親からの集団圧力の効果. *心理学研究*, 47:193-201.
- 28) ル・ボン 櫻井成夫 (訳)：群衆心理. 岡倉書房, 1947. (LeBon, G.: *Psychologie des foules*, 1895.)
- 29) Greenwald, A.G.: Is anyone in charge? Personanalysis versus the principle of personal unity. In J. Suls (ed.): *Psychological perspectives on the self*, Vol. 1, 151-181, Lawrence Erlbaum Associates, 1982.
- 30) 押見輝男：没個性化. 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一 (編)：社会心理学パースペクティブ 1：個人から他者へ, 第5章, 第2節, 128-140, 誠信書房, 1989.
- 31) 押見輝男：自己意識特性と仮想場面における没個性化の研究. *対人行動学研究*, 5:1-9, 1986.

受付日：1990年10月23日